

修道誓願 28 年

イ：インタビューア 和：マリア・モニカ和加子

イ：こんにちは、シスターの洗礼名、Firstname、今の使徒職を教えてください。

和：マリア・モニカ和加子です。短大の教員、霊的同伴[神様がその人にどう生きて欲しいと思われているのかを共に探す]と本会のアソシエート[聖マルグリット・ブールジョワ（以下 M.B.）の精神を共に生きる信徒の方々]の係を担当しています。

イ：幅広くいろいろな使徒職をなさっているようですね。ところで、小さいころはどんな子どもだったのでしょうか。

和：近所に女の子がいなかったというのがありますが、家の中での遊びが好きでした。性格は、内弁慶で意地っ張りの負けず嫌いでしたね。

イ：学生時代は、どんな事を考えながら過ごしていましたか。

和：実家はお寺でしたが、宗教的なことを強られることはなかったのもので、桜の聖母短大に入学して、初めて宗教を意識しました。申し訳ないのですが、桜の聖母は第一志望ではなかったのもので、これから自分はどう生きていけばよいのだろうか、なんていうことも思っていました。そんな時、周りにいる学友たちに違う価値観を見出し、宗教の授業では、「生きていますか？あなたは、生かされているのです。」ということを知り、カルチャーショックを受けました。お経も知らない私が聖書を読み、いったいこれは何…と。それから社会正義に関する本に興味を持ち、社会を変えたいという思いが湧いてきました。聖書の言葉あるいは、周りの友人たちから、少しずつキリスト教（キリスト）に出会っていきました。それまでは、泥靴でぬかるみを歩くような重たさや、自己嫌悪に覆われていた私が、重さから解放され、そよ風が吹く中を歩いているような感じになっていました。そうだ、教会にも行ってみよう、そういう気持ちにもなったんです。

イ：桜の聖母短大に入学したことが、人生のターニングポイントになったようですね。卒業後は、どんなお仕事に就いたのでしょうか。

和：パートタイムで、調乳指導の栄養士、それから OL もしました。ただ、「会社とは何か」を考えて、本気で働く気はなかったのかな…。

イ：「シスター」という方と初めて会ったのは、短大時代だと思いますが、どんなイメージを持ちましたか。

和：それまでは、小説の中の登場人物として、そういう人がいるという程度でした。実際に知ると、30 人もの女性集団（現在はもっと少人数）で暮らしていて、「どういう人たちなんだろう、得体が知れないな」なんて思っていました。

イ：にもかかわらず、卒業前に洗礼を受けられたのですね。その後、ご自分の人生の選択をする時、別

の生き方もあったと思いますが、なぜ、修道女（シスター）の道を歩もうと思われたのですか。

和：もちろん結婚すると思っていました。縁談も何回かありました。ところが、ある時、母から「修道院に行きたいと思っているんでしょ」と言われ、「えっ、そういうこと考えてもよかったの？」と心の中で思い、考え始めました。まるで、イエス様からプロポーズされたような…。そしてすぐ入会を決めました。

イ：入会を決めても、すぐ修道院に行くわけではないですよね。家族の方の反応はどうでしたか。

和：もちろん大反対でした。会話もなくなり、私も何も考えられなくなり…。そんな時、祈りの仲間との分かち合いが私の助けでした。時間はかかりましたが、生半可だった私の信仰を、神様が育ててくださっていたのです。父は、「反対しても入会するなら、反対はしない。賛成もしないが。」と言ってくれました。父なりに、これ以上の言葉はなかったと思います。

イ：他にも修道会がある中で、なぜ、コングレガシオン・ド・ノートルダム修道会（以下CND）に決めたのですか。

和：他の会も知っていましたが、私の目からは真面目そうに見えて、自分には何か違うなど。

イ：入会してから、3年間の修練院生活の中で嬉しかったことや苦しかったことは何でしょうか。

和：みんな似たような経験をしていると思いますが、修練者同士、喧嘩をすることもありました。十字架の前で、自分が情けなくなり、こんな私を神様は愛してくださっていると思いました。すると、そうだ、この隣の人も神様が愛していらっしゃるんだと気づかされたのです。十字架を通して、「愛するとは、好き嫌いの感情ではない」ということが分かりました。私にとって、修練院での苦しいことと嬉しいことは、同じ出来事でした。

イ：では、初誓願後に最初に直面した困難は何でしたか。

和：学校に派遣されて、いきなり中学2年生の担任になったことです。右も左も分からないのに、1組だったので、何でも最初にしなければならないんです。また、どこからか私がお寺の娘だということが知れて、親を捨てたのか…なんていうふうに思われることもあってとても辛かったです。好きで教師になったわけでもなく、神様が望まれているからここにいるだけ、それなら最後までさせてくださいと祈りました。

イ：大変だったからこそ、神様の存在なくしては、今のシスターはないですよね。修道生活の中で、もう無理かもしれないと思ったことはありましたか。

和：私の場合は、入会前に泥沼があり、初誓願後もまた大変でしたから、その後は、神様に文句を言って苦しみながらも、私を解放してくださる方と信じてこれまで歩んできました。傷があるからこそ、そこに神様の愛が見えてくるのではないのでしょうか。

イ：これまでの修道生活で感謝していることは何ですか。

和：「CNDを辞めてください。」と言われる可能性もあったかもしれませんが、それでもここに置いていた

だいていることですね。多くの人々にも出会わせていただきました。そして、自分が傷ついているからこそ、同じような人たちに共感して、聴いてあげたいという気持ちもあります。

イ：ここからは、未来に向けてお聞きします。これから CND に入会する女性たちを、どんなふうに迎えたいと思っていますか。また、何を期待しますか。

和：これから私たちの会がどうなっていくのか分かりませんが、神様は、CND に新しい未来を描いていらっしゃると思います。ですから、新しい入会者と聞くとワクワクします。その人たちを支えながら、一緒に使徒職に励みたいと思います。期待することは、神様の望みをちゃんと受け止めてほしいということですね。「固有の召命」さえ見つければ、おなかの底から力が出てくるはずですよ。たとえ誰に褒められなくとも…。

イ：固有の召命、これは神様からの宝物ですね。ところで、聖書の言葉から座右の銘を選ぶとしたら何でしょうか。

和：徴税人マタイの召命で、イエス様がマタイを呼ぶところです。イエス様は、罪びとや病人を癒すために来られたのですから。この「招き」は、私を支えています。

イ：最後に創立者聖 M. B. のどんなところに惹かれますか。

和：M. B. が、20 歳の時体験した‘回心’ [ロザリオ行列の時マリア像が輝いて見え、その日以来神様に心を奪われる体験]や、修道会への入会が困難を極めたところは、私と共通点があって惹かれます。また、33 歳 (1653 年) で大西洋を渡り、フランスからカナダへと向かった勇気。そしてなにより M. B. の創立した CND の特徴は、シンプルさを追求する修道生活でありながら、識別によって宣教に必要と判断すれば、個人の自由に任せられているところがあります。もちろん責任を伴う自由ですから、修道会とシスターズの間には、神様を交えた深い信頼関係があるのです。

イ：もう少し話しておきたいことがありましたらおっしゃってください。

和：未来の CND に関してですが、今まで CND は学校教育が主な使徒活動でしたが、これからは、それ以外にも、奉仕の場が広がってくると思います。たとえば、子ども食堂のようなことも考えられますし…。他にも、それぞれの姉妹が温めている考えもあると思います。

イ：率直にお答えくださり、ありがとうございました。私も未来の新会員のことや新たな使徒活動のことを想像すると、やっぱりワクワクしてきます。



インタビュアー：シスター高橋香久子
シスター高橋もと子